伊勢物語（いせものがたり）

平安前期の歌物語。現存する歌物語中最古の作品。古くは《在五が物語》《在五中将日記》などの異称もあった。書名の由来も、伊勢(伊勢御(いせのご))の筆作にかかること、〈伊勢〉は〈えせ(似而非)〉に通ずること、巻頭に伊勢斎宮の記事があること、などをそれぞれ根拠に挙げる諸説があったが、なお不明である。作者も上の伊勢の説のほか、在原業平自記説もあり、紀貫之説も近年有力となりつつあるが、これまた特定は困難であろう。内容は諸本により若干の増減があるが、通行の天福本で全 125 段から成る。在原業平とおぼしい男が元服してから死ぬまでの一代記風の体裁で、ほとんどすべての段が〈昔、男ありけり〉あるいは〈昔、男〉という言葉で書き出されている。しかし、その中には明らかに業平ではありえない人物もしばしば顔を出し、また芹川の行幸のように、業平死後の事件も現れる。歌数は全部で 209 首、そのうち業平の歌は 30 余首にすぎず、他は業平に仮託されたものである。在原業平は六歌仙の一人として名高いが、生前から放縦な生活をもって知られていたようで、二条后高子との情事でことに艶名をはせた。880 年(元慶 4)の死後間もなく、おそらく《古今集》撰進(905)以前に、業平の遺稿の類をもとにして小さい歌物語ができ、その後複雑な過程を経て増補を重ね、ときには部分的な改編なども受けて、《後撰集》成立前後にほぼ現在の形に落ち着いたかとみられるが、その後も広本系の異本では多少の増補が加えられた可能性がある。

内容は男女の恋愛を主とするが友愛、親子の愛もあり、純愛とは趣の異なる遊戯的な男女交渉や宴席での献詠とか地方への旅の旅愁を主題としたものもある。そこに一貫するものは“みやび”、つまり宮廷人にふさわしい上品で洗練された対人交渉とか反応、またその間の心遣いのさまざまである。その多くは純粋な愛情をもととした美しいあるいは激しい行動であるが、ただあくまで都市貴族的な価値観に基づくものであるから、粗野な田舎者を蔑視するなど、普遍的な人間愛とは距離がある。またその表現には、同じく歌物語と呼ばれる《大和物語》の場合のような世俗性、ゴシップ性への密着がみられず、逆にそれらを払拭して、より普遍的感覚的な言葉に置きかえる。業平らしい男の行為を記すに当たって、これを〈男〉、相手を〈女〉と記すのはその端的な表れであり、固有名詞を極度に削り去ることで、詩的な内面化、象徴化を果たしたのである。

伝本は藤原定家の整えた天福本のほか〈広本系〉〈略本系〉の幾つかが現存し、章段に増減が見られるほか、特殊な形の〈真名本〉もある。また古くは〈小式部内侍本〉〈業平自筆本〉の名も伝えられたが今は散逸している。《本朝書籍目録》には〈業平朝臣一巻〉の書名が見え、漢文伝記らしいがこれも正体は不明である。《伊勢物語》の後代への影響の大であることは《源氏物語》と双璧であり、日本人の心情形成にかかわることもまた大きい。

今井 源衛

(c) 1998 Hitachi Digital Heibonsha, All rights reserved.

歌物語（うたものがたり）

平安中期の物語の一様式をあらわす文学用語。語彙としては二義あり，一つは早く《栄華物語》(〈浅緑〉)にもみえ，歌にまつわる小話の意で，当時〈うたがたり〉と呼ばれた口承説話とほぼ同一内容のものと思われる。二つは近代に入ってからの新しい用法で，《竹取物語》《宇津保物語》などを〈作り物語〉と古くから呼んできたのに対して，《伊勢物語》《大和(やまと)物語》《平中(へいちゆう)物語》の三つを新しく区別して呼んだのであり，文学史記述の便宜から生じた用語である。現在ではこの第二義の面で論じられることが多い。以下もその意味で扱う。もっとも歌物語の萌芽は古く，記紀歌謡や万葉歌にも，関連する記述が前後に付け加えられれば，部分的に歌物語の形に近づくともいえる。とくに平安朝の《後撰集》や私家集などでは，歌を媒介とする男女の交渉に興味を集中するため，詞書が長くなって，この傾向は加わる。しかしそれらを，なお一般に物語と呼び難いのは，歌をめぐる小話群全体としての統一的視点や虚構の自覚的方法などが，相対的にいって確立していないからである。

これを形態的にいえば，歌物語は和歌にまつわる短小の説話や伝承の集成であり，その集成された事情や編者の性格によって差を生じている。特定の主人公を立てる《伊勢物語》や《平中物語》と，そうでない《大和物語》とでは，全体の統一性にかなりの相違があり，同じく特定の主人公を立てながら，一代記風に編成された《伊勢物語》とそうした秩序をもたない《平中物語》とでも違う。さらに個々の章段の素材･表現にわたる虚構･潤色度の大小や，章段連接の契機をなす連想の個性差もある。文芸的効果としては，全体として抒情性，心理性が濃く，概して伝奇的な作り物語と対照的である。しかしこれも和歌と地の文との絡みかたや比重の置きかたに左右されるわけで，地の文の用語に詩語をきびしく選ぶ《伊勢物語》と，即物的世俗的な語彙をそのまま用いる《大和物語》では大差がある。忠実な説話採録者と積極的な虚構修飾をあえてする編著者の両極の間に，これらの作者たちはそれぞれの個性を示している。歌物語の素材は口承の〈うたがたり〉を初めとして，既存の歌集，歌稿類であり，逆にまた歌物語はそれら周辺領域の作品群に素材を提供して，その相互関係は緊密である。特に《伊勢物語》の後代に与えた影響は絶大で，それは《古今集》や《源氏物語》とともに，日本文化の伝統形成に大きく作用した。

今井 源衛

(c) 1998 Hitachi Digital Heibonsha, All rights reserved.

在原業平（ありわらのなりひら）825(天長 2)年～ 880(元慶 4)年

平安初期の歌人。六歌仙，三十六歌仙の一人。平城天皇の皇子阿保親王の五男。母は桓武天皇の皇女伊登内親王。826 年，阿保親王の上表によってその子仲平･行平･業平らに在原の姓が下された。業平は五男の在原であったので在五(ざいご)と呼ばれ，権中将となったため在五中将とも呼ばれた。841 年(承和 8)，17 歳で右近衛将監となり，蔵人，左兵衛佐，右馬頭を経て，877 年(元慶 1)，53 歳で従四位上右近衛権中将となった。翌年相模権守を兼ね，のち美濃権守を兼ねたが，879 年に蔵人頭を兼任，その翌年 56 歳で没した。紀名虎の子有常の女を妻とし，名虎の女が生んだ文徳天皇の皇子惟喬親王と親しかった。業平が生きた時代は藤原氏繁栄の基礎が築かれた時代で，良房の活動によって紀氏などの有力氏族が退けられていった。《三代実録》は業平の伝を〈体貌閑麗，放縦不拘にして，略，才学無く，善く倭歌を作る〉と記しているが，美男で放縦な業平が，官人として必要な漢詩文の学識を持たず，和歌にうつつを抜かしていたことを伝えている。業平の歌は，《古今集》の 30 首，《後撰集》の 11 首，数種の《業平集》などに収められているものを合わせて約 50 首が残されているが，豊かな心情の表現と発想の奇抜さに特色がある。紀貫之は〈業平はその心あまりてことばたらず。しぼめる花のいろなくて，にほひのこれるがごとし〉(《古今集》序)と評したが，ことばの響き合いの中に余情をあらわすことにすぐれた業平は，いわゆる六歌仙時代の中心として，和歌復興の先駆となった。

《古今集》は，業平の歌についてはとくに長い詞書をつけているが，それはつぎのようなことを伝えている。(1)惟喬親王に従って桜狩りに行ったこと。皇位継承の望みを絶たれた惟喬親王が失意の中に出家して小野にこもると，深い雪の中を訪ねて〈忘れては夢かとぞ思ふおもひきや雪ふみわけて君を見んとは〉(巻十八)とよんで悲しみにくれたこと。(2)五条后の宮の西の対に住む女性に恋し，その思い出を〈月やあらぬ春や昔の春ならぬ我が身一つはもとの身にして〉(巻十五)とよんだこと。(3)東国に下って，三河国の八橋で〈唐衣きつつなれにしつましあればはるばるきぬる旅をしぞ思ふ〉，武蔵国の隅田川の辺で〈名にし負はばいざ言問はむ都鳥我が思ふ人は有りやなしやと〉(巻九)という歌をよんだこと。(4)伊勢に下り，ひそかに斎宮に通じたこと。そのほかに，布引滝に遊んだこと，紀有常の女のもとに通ったこと，母が長岡に住んでいたこと。阿波介として任国に下る紀利貞を送るため，また藤原基経の四十の賀のために歌をよんだこと。業平の家にいた女に藤原敏行が通ってきたことなどである。《古今集》の編者が長文の詞書を何によって記したかについては諸説があるが，近年の研究では，東下りや高貴な女性との密通事件も事実ではないとされ，業平の事跡の物語化は，《古今集》にも顕著に見られると考えられるようになった。他方，《古今集》と同じころ，900 年前後に成立したとみられる《伊勢物語》には業平の歌を核にした数々の物語が収められているが，《古今集》と《伊勢物語》によって，業平は漂泊の旅にも出た無用者的な〈すき者〉，失意の皇子と慰め合う名門出の貴公子として描き出されることになった。そして，そこに浮かび上がる業平は，平安時代中期以降の貴族文化の一面を体現する人物であり，和歌の復興，物語文学の成立を支える精神を具体化した人物であったと考えられる。

平安時代中期以降，《伊勢物語》は全編が業平の行状の物語であると考えられるようになったが，業平に関する説話の多くは，《古今集》の歌をもとにして作られた。先にあげた(1)に関する説話は，《今昔物語集》や《発心集》に見え，藤原氏の権勢に批判的な立場をとる《大鏡》では，歴史のたいせつなひとこまとして語られている。(2)は清和天皇のもとに入内する前の二条后(高子)との密通の話として，他の恋愛譚を合わせて発展し，《古事談》《宝物集》《無名抄》などでは，業平が二条后を盗み出したが后の兄弟たちに奪い返されるという話になり，忍んで通うために剃髪したとか，事が発覚したため懲罰として髪を切られ，髪が伸びるまで東国に下ったというような話も生まれた。また(2)と(3)が結びつけられて，都にいられなくなった業平が東国に下る話が有名になり，単に東下りといえば，業平の東国への旅をさすほどになった。さらに，業平が奥州八十島で小野小町のどくろに会う話も種々の説話集に見え，一条兼良の《伊勢物語愚見抄》は，業平を馬頭観音，小町を如意輪観音の化身とする説をあげている。《伊勢物語》は，歌の心を涵養するために繰り返し読むべき古典とされ，《源氏物語》よりも重んぜられていたため，《雲林院》《井筒》《小塩》《杜若(かきつばた)》をはじめ，《伊勢物語》に取材する謡曲が数多く作られ，業平は能の舞台にも登場することになった。それらはいずれも王朝の美の極致を夢幻的な雰囲気の中にあらわそうとしたもので，気品の高い曲として重んぜられている。こうした業平に対して，狂言の《業平蛭》は，色好みの業平を街道の蛭屋に登場させ，醜い蛭屋の娘とのかけひきの中に，室町時代の好色で貧乏な貴族をあざ笑う筋になっている。王朝のみやびを体現する業平は，歌舞伎では，恋愛譚の脚色も行われたが，もっぱら舞踊の主人公として登場し，数々の踊りが作られた。それらを総称して業平躍(おどり)という。また《伊勢物語》が広く読まれたため，業平の説話は，絵画や工芸の題材にとりあげられることが多く，浮世絵では見立絵の画題としてさかんに用いられた。業平は小町と好一対をなす美男であるが，小町のような落魄の物語はなく，誕生地や墓所についての伝説も少ない。王朝憧憬と結びついた業平は，小町や和泉式部，西行などのように，庶民の間に広く伝えられる伝説の主人公とはならなかったことが知られる。

大隅 和雄

(c) 1998 Hitachi Digital Heibonsha, All rights reserved.